

「地域学」を創る

- 鳥取大学地域学部の試み -

2

柳原邦光^{*}・韓燕麗^{**}・仲野誠^{***}・野田邦弘^{****}

Creating a Theory of Regional Sciences:
A Challenge for the Faculty of Regional Sciences, Tottori University

Part II

YANAGIHARA Kunimitsu, HAN Yanli, NAKANO Makoto, and NODA Kunihiro

キーワード：生の充実，ノーム，わたし（自分），人と人とのつながり，生きられた空間，創造都市
keywords: a satisfying life, norm, self, social ties(sociabilité), espace vécu, creative city

はじめに

鳥取大学地域学部は創設以来，今年度で5年目である。その前身である教育地域科学部の5年間を加えれば，10年間にわたって学部教員は地域学（以下で地域学というときはすべて本学部の地域学を指す）に取り組んできたことになる。その間，様々なチャレンジがなされ，地域学部は今や研究においても実践においても地域と深く関わるようになっていく。授業でも「地域研究論序説（教育地域科学部地域政策課程と地域科学課程の1年必修科目）」「地域学入門」，「地域学総説」（それぞれ地域学部1年と3年の学年必修科目）においてさまざまなテーマを設定して検討を重ねてきた。また，地域住民のために「地域学セミナー」も開催してきた。筆者（柳原）はたまたまこれらの授業のほとんどすべてに関わることができた。フランス史の研究者としては容易な仕事ではなかったが，他では得ることのできない貴重な経験となった。

10年の区切りを迎えて，ここで鳥取大学地域学部の地域学が今どこまで形を成しているのか，他の執筆者とともに批判的に検討してみたい。ただし，学部教員の活動は多岐にわたっているので，本稿では，10数名の教員で準備・実施してきた「地域学総説」（2006～2008年度）を中心に議論す

^{*} 鳥取大学地域学部地域文化学科

^{**} 鳥取大学地域学部地域文化学科

^{***} 鳥取大学地域学部地域政策学科

^{****} 鳥取大学地域学部地域文化学科

る。この授業の目的が地域学の理論的全体像を提示することであり、そのために多くの教員が議論を積み重ね、試行錯誤してきたからである。年度ごとの成果については筆者の作成した報告¹があるので、詳しくはそちらをご覧ください。また共同論文²も参照していただきたい。本稿の課題は、3年間「地域学総説」の授業実施責任者を務めた筆者が地域学に関する理解を紹介し、他の執筆者がこれを批判的に検討し自論を展開することを通して、これまでの地域学を評価し、問題点と今後掘り下げていくべき点、目指すべき方向を明らかにすることにある。

1. 地域をみる視点と地域学(柳原邦光)

「地域学総説」で獲得した知見を中心に既に2度筆者の地域学理解について述べている³ので、ここでは地域をみる視点を軸に据えて、地域学をどのように考えるのか、紹介する。

(1)なぜ地域なのか 人・地域・国家

なぜ今、地域なのか。地域という空間的広がりを前提にした枠組みで考えることにいったいどんな意義があるのか、どのような効果が期待できるのか。「そもそも地域とは何か」。これは地域学を考えると、常に念頭におくべき問いである。

地域が目目されるようになったのは、ひとつには国民国家の役割が変わりその比重が低下したことにある。西欧近代以来、事物を秩序だて制度を構築する際の柱は個人と国家であった。しかし、今日では、人・モノ・情報・技術が易々と国境を越え、人々の生活はつながりを深め均質化しつつある(グローバル化)。国家間・国民間の違いもかつてほどではなく、国家が独自に決定できる部分は小さくなっている。こうしたなかで浮かび上がってきたのが、国民国家とは異なる次元や形での結びつきであろう。地域もその一つで、国家を越えた空間、あるいは国境をまたいで存在する空間、国境内の様々な空間が考えられる⁴。

わが国に目を移せば、背景にある事情はともかく、求められているのは、これまでの地方のようにもっぱら国家の指導と保護に服し中央を目指すべきモデルとするのではなく、自らの特性と状況に即して自ら決定すること(「地域の自立」)である⁵。この場合、主役として想定されているのは自治体と地域住民であろうが、この視点は、問題の解決をそれにもっとも身近なところで関わるものがおこなうという意味で、重要である。財政危機と少子高齢化・過疎化、これまで生活を支えてきた諸制度の衰退あるいは消滅の危機、外国人労働者も含めた雇用の不安定化といった深刻な状況においてであるから、問題の解決は容易でない。地域がどのように判断し決定するかは、極めて重

¹ 柳原邦光「『地域学総説』の挑戦」、『地域学論集(鳥取大学地域学部紀要)』第3巻第3号、2007年、同「『地域学総説』の挑戦2」、『地域学論集(鳥取大学地域学部紀要)』第4巻第2号、2007年、同「『地域学総説』の挑戦3」、『地域学論集(鳥取大学地域学部紀要)』第5巻第2号、2008年。

² 柳原邦光・光多長温・吉村伸夫・一盛真・家中茂・藤井正「『地域学』を創る - 鳥取大学地域学部の試み - 」、『地域学論叢(鳥取大学地域学部紀要)』第4巻第3号、2008年。

³ 柳原他「地域を創る」、370 - 372頁、柳原「挑戦3」、193 - 196頁。

⁴ 梶田孝道『統合と分裂のヨーロッパ EC・国家・民族』、岩波書店、1993年。

⁵ 光多長温教授基調報告「地域を捉える視角と課題～経済と国土計画的アプローチ」柳原前掲論文「挑戦」、348 - 349頁、光多長温「序章 地域政策時代の幕開け」、藤井正・光多長温・小野達也・家中茂 編『地域政策入門 未来に向けた地域づくり』(ミネルヴァ書房、2008年)、6 - 8頁。日本の地域政策の変遷と今後の展望については、光多長温「地域政策の歴史と展望」、前掲書第3章、「地域の自立」の法制度的側面と現状については、片山善博「地域の自立に向けて」、前掲書補論を参照。

要なのである。

地域という空間的・集団的枠組みへの着目が以上のような様々な要因による国民国家の役割変化に由来するとすれば、「地域とはなにか」、「地域はどうあるべきか」という問いが切実な問いとして発せられるのは、当然のことであろう。地域に関する考察は、このような大きな構造・関係性との関連を視野に入れてなされねばならない。

他方で、近代のもうひとつの柱である個人についてはどうであろうか。なるほど、国家という巨大な空間的・集団的枠組では、理性的・合理的に判断する、自律的な個人（市民）、ナショナルなアイデンティティをもった個人が制度設計の基礎単位である。しかし、この枠組をいったん脇においてみれば、見えてくるのは、生まれ育った環境のなかで獲得された感じ方や考え方、慣習や規範、そしてこれらをほとんど意識することなく生きる人々の姿であろう。あるいは、このような人々の営む日常の生活とそこから生まれてくるものということもできる。これはどこに行っても同じものというわけではない。このような同じものを共有する空間を地域、その特性を地域性ということもできるだろう。換言すれば、地域とは、一定の空間の広がりの上で形成された集団のある種の「共同性」であり、そこで展開されている社会関係である⁶。

もちろん、人は常に同じ環境で育ち暮らしていくとは限らない。農村 都市間の人口移動 転勤・転校もある。また、移民など国境を越えた人の移動もある。生まれもった地域性から切り離されるのであるから、移動することで、人は地域性を修正したり何かを付加して（新たな地域性に適応して）生きているといえるかもしれない。あるいは、確たる地域性をもっていないことも考えられる。これを地域からみれば、ひとつの地域に異なる地域性をもつ人々、あるいはもたない人々が混在しているということである。どこそこの地域の地域性といっても、決して動かざるものではなく、むしろ異質なものを、対立や軋轢を内包しているとみるべきであろう⁷。さらにいえば、地域性に「絆」や「支え」という側面だけでなく、「しがらみ」や「制約」の側面もある。この意味で、個々の人間と地域性との間には対立や葛藤が存在しているはずである。したがって、地域や地域性を自明の、不動のものとして発想することには大きな危険が伴う。個々の人間の欲求・願望・意思を視野の外においてしまえば、地域という枠組の検討自体がその意義の多くを失うことだろう。というのも、なるほど地域は一定の空間をベースとする集団的な枠組みであるが、決して個々の人間とその意思等を無視してはならないからである。地域という枠組みで発想するそもそもの目的は、「生の充実」・「良質な生活」の実現であって⁸、それには人間の尊厳、人と人の結びつき、「共同性」が深く関係していると考えられるからである。

以上のように、個人（市民）と国家という視点だけでなく、そこに地域や地域性、それに支えられ制約されるとともにそれぞれの意思をもった個々の人間という視点を加えることで、社会をより複合的かつ多層的に捉えることができるであろう。その場合、たとえば、ナショナルなもの、原理的なものと地域性との関係を、さらにいえば、グローバルなものとの関係を具体的に問うことが重要課題のひとつとなる。また、一人一人の人間からみれば、様々な構造・関係性のなかで生きて

⁶ 地域学部の「地域」の定義は、「人々が生活している空間のひろがり」と、その広がりの中で展開されている社会関係」である。地域学部ホームページ「『地域』と『地域学』」を参照。

⁷ 仲野誠「地域社会とグローバル化」、藤井他編『地域政策入門』、283 - 290頁。

⁸ 吉村伸夫基調報告「今なぜ地域なのか 地域の文化的個性と生の充実」、柳原「挑戦」、346 - 347頁。

⁹ 仲野前掲論文、271 - 272頁、290 - 292頁。

いることが明らかとなるだろう。このような一連の考察を通して、「生の充実」・「良質な生活」の実現を目指した効果的な取り組みを構想することが可能になるのではないだろうか。

(2) 地域を考える 様々な視点とアプローチ

それではどうすれば地域や地域性を捉えることができるのだろうか。これにはいくつもの視点とアプローチが可能であろう。

(a) 俯瞰的・客観的視点

ひとつには、地域を俯瞰的・客観的に見る視点を挙げることができる。たとえば、光多長温（以下、学部教員・研究者・実践者の見解を紹介するが、すべて敬称を省略させていただく）は2006年度の「地域学総説」で、いくつかの指標から日本の国土構造（経済的な地域構造）の地図を作成し、その経年的変化を示すことによって戦後日本の国土構造がどのように変化しているかをヴィジュアルに提示してみせた。ここに現れた、いくつかのまとまった空間は都道府県のような行政区分とはまったく重ならない。しかもこれらの空間が織り成す一枚の地図はまるで生き物のように急速に姿を変えている¹⁰。その変化のあまりの速さには驚くばかりだが、自治体であれ、何らかの地域であれ、こうした変化を無視した取り組みは徒勞に終わるのではないだろうか。また、松本健治は「地域と健康 とくに発育促進現象をめぐる」と題した報告（2007年度）において、健康に関する都道府県単位のデータを数値化して地域性を捉えようとしている。この手法は都道府県単位という限界はあるものの、地域性を把握する重要な手がかりを提供してくれる¹¹。このように統計資料を駆使して見えない地域を見えるようにすることもできるのである¹²。

光多はまた、2007・2008年度講義において地域と「地域学の体系」を次のように説明している。地域とは、自然・環境・地盤・地質といった生態系軸と歴史などの文明系軸とが交わったものであり、そこに独特の生活や文化が生まれる。これに政策・将来方向が加わって新たな地域が創られていく。地域とはこのように過去も含めたあらゆる要素の複合体であるから、これを研究対象とする地域学では、地域という視点からすべての学問領域が動員される。地域学とは、「地域の諸事象について、時間（歴史）・空間（場所）・主体（人）という三位一体的座標軸を組み合わせた視点から統合的・俯瞰的に把握するもの」なのである。また、地域学の特質として、光多は客観的研究と行動科学の融合、「事実の把握 (Sein) とあるべき姿 (Sollen) の視点の保持」を挙げている。地域学は、「地域がどう在るか」を研究するだけでなく、「地域の在るべき姿」を思い描いて、それを実現すべく実践するものだ、というのである¹³。

¹⁰ 柳原「挑戦」, 329頁。

¹¹ 柳原前掲論文「挑戦2」, 196 - 197頁。

¹² 筆者自身も聖職志願者や非キリスト教化運動のデータを数量化して、フランス革命期の前後数百年間の宗教心性・革命的心性に関わる「地域」と地域構造（「二つのフランス」）について論じたことがある。この種の研究手法はフランスでは珍しくない。柳原邦光「フランス革命と長期的持続 聖職者リクルートと宣誓問題を通して」, 岡本明編『支配の文化史 近代ヨーロッパの解説』, ミネルヴァ書房, 1997年, 148 - 192頁。

¹³ 柳原他前掲論文「『地域学』を創る」372 - 375頁, 柳原前掲論文「挑戦3」179-180頁を参照。なお、本節で紹介する吉村、仲野、家中の見解についての記述は、光多のそれと同様に「挑戦2」, 「挑戦3」の記述とほぼ重なっている。詳しくは、「挑戦2」と「挑戦3」をご覧ください。また、次の論文も参照されたい。藤井正「第1章 『地域』という考え方」, 藤井正ほか編『地域政策入門』, 10 - 20頁。ここでは主に地理学の知見から「地域」を研究するための方法論が紹介されている。

光多のこの見解は地域を俯瞰的・客観的にみて、その複雑さと地域学の特性を見事に説明している。しかしながら、筆者には、この説明では地域と地域学の存在意義がまだはっきりとみえてこないように思われる。あるいは、地域にコミットする強い動機を得ることがなかなか難しいのではないだろうか。この点を補強したのが、地域を文化的な観点から捉えて、人と地域との関係を理念型で示した吉村伸夫の見解である。この場合、地域とは、独自のノーム体系（地域の人々に共通の行動規範・振舞い方・考え方や感じ方）をもち、「当たり前さ（厳密にはその尺度）を共有する人々が形成する社会的まとまり」、「精神的な意味での生活の質の向上という視点から考えて、どのような状態が実現しているときに満足できるのか、幸せなのかという感覚を共有している空間」である。つまり、地域とは、固有の文化的個性をもった空間で、住民を一人前の人間につくりあげてゆく「文化的装置」であって、「自己」に先立って存在し、「自己」を作り上げるものなのである。それだけに、地域住民がこれを自覚するのは難しいが、地域の文化的個性は、住民にとって自己の尊厳の一部となっており、「生の充実」にとってきわめて重大な意味をもっているという¹⁴。個人の尊厳と「生の充実」は決してその人ひとりのものではなく、地域という一定の集団の文化的個性と不可分に結び付いているということになる。

この見解は、筆者にとって一定の説得力をもっている。何より地域学の目的が明確になった。「自己」の「生の充実」の実現である。が、それは集団的なものと関係している。決して個人だけのものではない。しかし、違和感もある。筆者には、地域の意味とそれが果たす機能が強力すぎるように思われるのだ。地域とはそれほど強く確固たるものであろうか。既に述べたように、人は同じ地域で暮らし続けるとは限らない。移動しつつ、あるいは自らの選択によって、様々なものを身につけていく。また、人と地域との関係はもともとかなり微妙である。さまざまな過程を経るなかで、個々人の地域性は薄まったり修正されたりする、そう考えるべきではないだろうか。

(b) 「わたし」からの視点

以上の俯瞰的・客観的視点は地域の存在を自明の前提として客観的に捉えようとするが、これとは対照的に「わたし」から出発する視点もある。仲野誠は「自分から考える地域 わたしがここで生きるといふこと」と題した講義で、「わたしのリアリティ」、「わたしによって生きられた地域とは何か」という問いから地域に迫っている。仲野の見解は、少し長くなるが、以下のようにまとめることができるだろう。

地域学は地域を強調し、地域という枠組で考えることを要求する。しかし、わたしたちは地域を、その重要性を実感できているだろうか。もしそれが難しいのなら、徹底的に自分の足元から考えてみてはどうか。たとえば、「わたしは楽しい豊かな生活を送っているだろうか。生き生きとした毎日を過ごしているだろうか。自分をかけがえのない存在だと思えるか。誰かに大切にされていると思えるか。誰かを大切にしていると思えるか。自分の胸に小さな誇りを抱いているだろうか。もしそうでないなら、どうしたらそう思えるようになるのか。」このような様々な問いを自らの心に発してみたとき、自分を肯定できるか否かは、他者とのように関わっているか、つながりを築いているのか、という問いに行き着くのではないか。「自立」して生きる。これは通常肯定的に語られる。しかし、本当にそうだろうか。実際には、「わたしの幸福」を作る仕掛けがあるのではないか。たとえば、家族、学校、会社、地域である。このような中間集団の中で他者と関わりをもって生き

¹⁴ 柳原「挑戦3」, 180頁。

ることと「わたしの幸福」との関係を考えるべきではないか。「わたしは支えられている/わたしは支えている」という実感が「わたしの幸福」の源なのではないか。

地域とはそのような人と人との関係の一つではないのか。こうした関係を自分達の手でつくっていくことが重要なのではないか。それには、何かを手に入れること、増やすことばかりに励むのではなく、与えること、返すこと、手放すことも考えて、そのような関係性を構築することが必要なのではないか。この意味で、地域学とは、当事者性（自分の人生の主人公であることを貫くこと、自分の心の中に小さな誇りをもつこと）を確認し、新たな関係性の構築を目指すものではないだろうか。地域といえ、すぐに地域活性化となってしまうが、活性化それ自体が目的なのではない。いい人生を生きたい。しかし、「人に迷惑をかけない」ではなく、「人に頼り、また人を助ける、自分が弱っても倒れない関係性」をどうやってつくっていくか、これが問題である。こうした努力を重ねることで、結果的に地域もよくなっていくのではないか。

仲野のこの見解は、「わたし」を起点にして人と人とのつながり・関係性の意味を問い、その見直しと再構築を迫るものである。この場合、地域という言葉は必ずしも必要ないかもしれない。明示されていないが、仲野には地域という枠組で発想すること自体に何か違和感があるのかもしれない¹⁵。それでも、あるいは、だからこそ、この視点は地域（「生の充実」に関わる場）を考えると欠かせないのではないだろうか。地域学にとって中核にすえるべき重要な視点ではないだろうか。というのも、地域という空間的・集団的枠組からの発想（俯瞰的・客観的視点）には何かを見えなくさせてしまいがちなところがあるように筆者には思われるからである。極論すれば、「わたし」・「自己」・人間の尊厳を抜きにして、今日、地域を考える意味などあるのだろうか¹⁶。

こうした問題は学問のあり方自体にも関わっている。家中茂は「なぜ地域学か - 『地域』という分析枠組」と題した講義¹⁷で、地域について論じるとき、「あなたにとって解かなければならない問題は何ですか？」という問いから始めている。「自分にとって固有の問題発見とは、すなわち、生きていることの証」であるから、その問題を解くための「道具」は自分で作りあげなければならない。このような道具の一例として、家中は『民間学事典』（鹿野政直・鶴見俊輔・中山茂、1997年）の「刊行のことば」（鶴見俊輔記）を引用しながら「民間学」とは何かを紹介している。その指摘は地域学にとって有益であるので、ここでもそのエッセンスを再度記しておこう。

明治以降、日本は西洋近代の学問を優れたものと考え、もっぱらその学習と応用に努めてきた。その結果、明治以前の学問とのつながりを失った。そればかりか、学問をになう個人の過去や未来とのつながりまでも失ってしまった。言葉を換えていえば、「人は生まれてくるやいなや問題に投げこまれ、問題を背負わされ、問題を探りあてようとし、問題と取りくむ。」ところが、明治以降の学問はこのような自分の問題から切断されている。そして学校を通して人は学問を自分の問題から切断する習慣を身につけた。「生きていること、やがて死を迎えるなかに自分の問題を探しあててを学問のひとつの道と認めるならば、そこに育つ学問は民間学である。」「自分の生活を自分の問題の母体としてとらえ、問題を探りあて、それと取りくむことを学問としてとらえる」、それが民間学である。

家中が「民間学」の紹介を通していわんとしたのは、自分の生活、自分のおかれた状況をまず理

¹⁵ 仲野にとって、「地域」も「グローバル」もあくまで「思考の方法」である。仲野前掲論文、271-291頁。

¹⁶ 柳原「挑戦3」、186-193頁参照。

¹⁷ 家中の講義の概要については、柳原「挑戦2」、192-194頁参照。

解し、そこから問題をつかまえようとする、すなわち自分の問題とつながった学問の必要性である。地域学の定義は「自分」によって様々なものとなりうる、と家中はいう。しかし、いかなる定義であれ、地域学は自分の問題から切り離された学問となってはならないのであろう。

仲野と家中の指摘は、われわれが地域と地域学を構想するとき、どこに目を向けるべきかを示しているのではないだろうか。

(c)生活者としての視点

『『地域学総説』の挑戦3』の「4. 地域住民の生活と行政」¹⁸で、筆者は当事者と第三者との認識の違い、ものごとの見え方の違いについて論じている。繰り返しになるが、地域学の抱えている問題、あるいは限界(?)という観点から、再度、取り上げたい。授業では、地域の住民として生活に直結する深刻な問題に直面した筆者が、当事者として、そしてできるかぎり研究者として、事実を具体的に紹介しつつその問題性を指摘した。受講者も他の教員も真剣に耳を傾けてくれたが、彼らの多くはあまり理解できなかったように思われる。それはその後のディスカッションの際に強く感じられた。もちろん筆者の力不足は否めない。また、すべてを語るわけにはいかないという事情もあった。それにしても、彼らと筆者との隔たりは看過できないほど大きかった。「何が問題かわからない」といわれるほど、悲しいことはない。これをどう考えればいいのか。

はっきりいえることは「切実さ」が共有されていないことである。極端にいえば、聴いている者にとってはただの事例でしかない。何の痛みもないから、もっている知識と理論を適用しさえすれば、それでいいのかもしれない。あるいは、ある種の図式を思い描こうとするのかもしれない。しかし、筆者にとっては、決して逃れることのできない辛い現実である。目の前の現実から目を逸らすことはできない。思考の出発点はまず現実の具体的なできごとであり、守るべきは生活であって、理論の当否ではない。もちろん問題を解決するために理論も用いるが、そのためには理論の大前提となっているものをその根本から捉え直して、現実と照らし合わせつつ把握し直さなければならない。そうしないと、実際には使えないのである。地域学にとって「考える」とは、この場合、高所から見下ろすのではなく、生活の現場に立って、まずはそこから、当事者の立場で検討し、次にその結果を第三者として再検討することではないか。この往復運動を続けることではないだろうか。

地域学を構想するとき、果たしてわれわれはこのような姿勢をもっているだろうか。「生活者」であるだろうか。われわれは民間学という言葉で鶴見が言わんとしたことを頭では理解できる。しかし、それを学術的に実践できているだろうか。真に地域学に組み込むことができているだろうか¹⁹。

(3)地域 過去・現在・未来

地域学の究極の目的は、「地域を創る」ことへの貢献である。しかし「地域を創る」とは無から有を生むことではない。論理的には、次の3段階からなる。まず「地域はどう在るのか」(過去か

¹⁸ 189 - 193頁。

¹⁹ 「わかりあえない」ということをよくよく考えたい。これについて、石牟礼道子は「要は、人様を思いやることができるかどうかだと思います。そういう心根のやさしさを、どうやって身につけていくかでしょう。」また、「強さではなく、弱さを考えます」と述べている(「生きていく強さと弱さとは 石牟礼道子さんに文化人類学者渡辺靖さんが聞く」, 2008年12月8日『朝日新聞』)。

ら現在まで),それを踏まえ,さらに人々の意思を加えて「地域はどう在るべきか」(現在から未来へ),それを導きの糸としつつ「地域を創る」という実践(行動科学と実践的活動)が生まれる。これは光多のいう「地域学の体系」と基本的に同じであろうが,筆者としては特に文化的な側面を強調しておきたい。この意味で,「地域はどう在るのか」を知ることにはかなり難しいといわねばならない。吉村がノーム体系の自明性として指摘しているように²⁰,地域性は長い時間をかけて歴史的に形成されたものである。それを身体化し,その中で生きている住民には当たり前すぎて自覚できないのである。ところが,これが将来の地域像,「地域はどう在るべきか」を大きく左右するのであるから,地域が発展するには,まずは「地域はどう在るのか」を意識的に知ろうとすることが重要になる。したがって,地域学はそのための方法を考えなければならない。

もちろん意識化の努力で事足りるわけではない。光多は,地域の現状(「土壌」,「苗床」)を踏まえて,あるいはそれを改善しつつ,地域住民自らが住民にとって好ましい状況を思い描き,その方向に地域を育てていく時代になったという。そして,こうした形で生じる地域間格差を「地域自立度格差」,「地域政策格差」と表現している²¹。実に興味深い指摘である。

このような俯瞰的視点から『わたし』からの視点や生活者の視点に転じてみれば,政策のような意図的な働きかけとは異なる次元の重要性が見えてくる。「地域づくり」という意識をもたず,日常生活の場において在るものを生かしつつ工夫を加えて自己の楽しみや願望を実現していく。そのような営みの中に社会性が潜在していて,結果として地域が心地よい,暮らしやすい場になっていく,創られていく,そういうケースもある²²。「地域学」はこのような事例からも多くを学ぶことができるのではないだろうか。さらにいえば,「地域づくり」という意識にともないがちな危険性を自覚できるのではないか。

以上,「地域を見る視点」という観点から地域学について考察してきた。というのも,地域という言葉に耳にしたとき,「狭さ」というか,「閉じた」,否定的な印象をもちがちではないかと危惧したからである。筆者はこの感覚を大事にしたい。地域学にとって重要な何かに関係していると思われる。この感覚が何を意味しているのか,さらに掘り下げて考えてみるべきであろう。

筆者に今いえるのは,地域に違和感や抵抗感があっても,これを「つながり」,特に「人と人との結びつき」という言葉に読みかえて,そこに生まれる,国家や官とは異なる,いくつもの「公」を見ようとするれば,今日の社会と人が抱える問題の解決に何がしか貢献できるのではないか,ということである。本学部の地域学は理念的には「公共性」を重要な要素に挙げているが,残念ながら,まだほとんど検討できていない²³。

また,地域を重層的に理解すること,換言すれば先述した構造や関係性において捉えることも,ほとんどできていない。わずかに,仲野誠が「ローカルのグローバルな基礎とグローバルのローカルの基礎 わたしの幸福とわたしたちの幸福」という講義でこの問題を検討するにとどまってい

²⁰ 柳原「挑戦」346 - 347頁,柳原「挑戦3」180頁。

²¹ 光多「序章」,藤井正他編『地域政策入門』,6 - 7頁。

²² たとえば,石見銀山の松場登美の場合。柳原「挑戦3」,186 - 189頁。

²³ 知のレベルでいえば,西欧発の普遍主義的人間観に基づく知のあり方(吉村)と生活のなかで具体的な経験を通して身体的に獲得された,民間学的な知のあり方(家中)との関係が問題になるが,まだきちんと議論できていない。柳原他「地域を創る」,390 - 391頁。

る²⁴。これも今後の大きな課題であろう。

2. 「地域」についてわたしが考えた二、三の事柄（韓燕麗）

地域学部に赴任してまだ三か月しか経っていない筆者が、ここで私見を述べるのはいささか不適任かもしれない。中国で生まれ育ち、中国語による教育を受けた漢民族の中国人である「わたし」は、もしもずっと中国本土で暮らしていたら、「中国文化・中国語・中国国籍」をすべて兼ね備えた「中国人マジョリティ」として一生を過ごすことになっただろう。しかし今ここに、越境することによって、マイノリティとして「地域」について考える機会が与えられた「わたし」がいる。わたしのように安定した大地の喪失と不在を体験し、複数の文化や社会の境界に生きなければならない人間は、今後もこの地域で、いやこの地球でますます増えることだろう。以下に、「わたし」一人が現時点で「地域」について考えた二、三の事を記しておきたい。

(1) 地域とは脱構築のためのタームである

近代という時代においては、居住する国に対する絶対的な忠誠心がつねに求められる。しかし同時に、グローバル化が進行し、ひと・情報が国民国家を超えてますます流動化しつつあるなか、安定した場を失い、当ても無くさまようことも、また近代性の一大特徴と言えよう²⁵。筆者はこれまでに、中国本土以外の場所に居住する中国系移民によって製作された中国語映画を研究対象に、映画のテキストと各時代の言説分析を通じて、移民たちの多様なアイデンティティが形成され変容するすがたを、歴史的・社会的なコンテキストの中に位置づけながら考察してきた。移民の帰属意識が変容するプロセスを解明することは、20世紀を通してわれわれを縛り付けていたナショナル・アイデンティティから解放される可能性を探求するために、そして「国民」としての自己同一性を超えたあり方を模索するわれわれのために、新たなアイデンティティを把握するための座標軸を提供してくれるのではないかと考えている。

このような移民とアイデンティティをキーワードとする筆者の研究論文では、例えば下記の一文のように「地域」という言葉を使用している。「映画のテキストに織り込まれた様々な象徴構造を分析することにより、東アジア諸国や地域間における複雑な力関係を考察する」²⁶。

ここで使った「地域」とは、「諸国」という言葉では包括しきれない意味が含まれており、東アジアの分かりやすい例を挙げれば、例えば台湾あるいは返還前の香港がそうである。また、太平洋の向こう側に目を向けると、中国系移民が比較的集中して居住しているアメリカの西海岸の各地域も筆者が調査に向かわなければならない場所である。つまり筆者にとって、地域とはまず国家という行政的区切りと無関係なところにある概念であり、「地域」という分析枠の特徴として、政治

²⁴ 仲野は「自分のローカルにのみ着目することは、それを支えている構造を見えなくする。ローカルを取り巻くものを見るようにする必要がある」と指摘している。柳原前掲論文、391頁。グローバル化による地域社会の変容と諸問題、その解消に向けた様々な取り組みについては、仲野誠前掲論文「地域社会とグローバル化」を参照。

²⁵ たとえば社会学の古典のひとつとされる『故郷喪失者たち』では、「故郷喪失」あるいは「安住の地の喪失の体験」homelessnessを、近代社会と近代人に特有の状態としている。『故郷喪失者たち：近代化と日常意識』P.L. バーガー他著、高山真知子他訳、新曜社、1977年。

²⁶ 韓燕麗「1950年代の香港における映画製作の実態に関する一考察 日本での製作活動と『蝶々夫人』を中心に」『人間・環境学（京都大学人間・環境学研究科紀要）』第11巻（2003年）、11頁。

的意味合いが極めて薄い、流動的で、明確な境界線を持たないという二点が挙げられる。

映画には国籍がある。世界中に配給されるハリウッド映画により、われわれは映画が無国籍の文化産物だという錯覚を起こす。しかしその一方で、世界地図に書かれている近代的国民国家の黒々とした国境線が²⁷、そのまま日本映画やフランス映画といった映画の区分にもなる。今日、国籍を指標として映画を分類し批評することは、映画研究の主流であろう。しかし筆者のこれまでの研究は、映画の前に国名を冠するいかなるナショナル・シネマの枠組みにも収まらない映画に焦点を当てるものであり、いわば<中国映画>とは呼ばれない<中国語映画>についての研究である。

このように、個々の国を単位とする文化研究のアプローチではもはや把握しきれない問題が存在している以上、国民文化のカテゴリーに従ってなされる文化研究の一枚岩的概念を切り崩す新たな視点をもっと探るべきであろう。地域というタームは、国民国家の枠の中で文化を見るという図式を崩すための有効な視角を提供してくれている。すでに多くの学者に指摘されたとおり、国境に囲まれ、それぞれが主権を持つとされる国民国家を一個の不可分の単位として、国民と国民文化が形作られてきた。いわゆる「国民文化」というものは、国民統合のための国家イデオロギー的な存在の一つにすぎない。このような考え方がすでに世界中の知識人と呼ばれる人々の間で共通のものとなりつつある現在、単一民族・単一文化の神話を無批判に受け入れることはもはや不可能である。筆者が所属する「地域文化学科」が「国民文化学科」などになることが想像できないのと同じように。

しかしなぜこのもはや自明になっているはずのことをあらためて強調する必要があるのか。純粋で固有な文化という概念は国民国家の時代が生み出した幻想にすぎないと分かっているながらも、地域文化と名称を変えてもなお社会を一つの均質状態として捉えようとしていないだろうか、自戒する必要を感じたためである。

「地域」という脱構築のためのすぐれた道具を手にして、それを使って新たな枠組みを構築してしまうだけでは勿体ない。例えば特定の言語、楽器、もしくはある飲食習慣、行動規範は、その地域の文化/共同性として大多数の居住者に共有されるかもしれない。しかしそのいずれも絶対的で不変のものではないし、また、必ずしもその地域の全住民の実態を体現できているわけでもない。いかなる文化について明確に定義づけようとしても、それは多数派による少数派に対する暴力あるいは同意による統合を意味するだろう。そしてマイノリティを抹消することは、単一文化を目指す国民統合の要請にほかならない。

われわれは地域を、閉ざされた均一な場所としてではなく、その境界線がつねに流動的であるものとして捉えるべきだろう。そしてその不明確さこそ「地域」の魅力的なところではなかろうか。筆者には、ある地域の文化はこうであるというふうに、専門家ぶって学生に明確な答えを伝えることに抵抗感がある。文化をあらかじめ規定された固定的実体として考えるような本質主義的な考え方を、同時に教えてしまうのではないかと危惧しているためである。国境線あるいは地域の境界線に基づく「文化の本質」の区分はいずれも絶対的なものではなく、そのときどきの社会的な力関係に支えられた相対的な構築物にすぎない。そのため、「実態being(ある地域の文化はこうである)」ではなく、「運動becoming(多様な文化が変化してゆくプロセス)」に注目すべきではないだろうか。

²⁷ 国民国家/Nation Stateは、フランスの市民革命を発端として形成された近代国家の様式である。国民国家の特徴のひとつとして、明確な国境の存在があげられる。古代や中世の国家にも中心的政治権力や政治機構は存在したが、国家主権の及ぶ境界線としての明確な国境は存在しなかった。

(2) 「地域を創る」ないし「地域学の究極の目的」について

「地域学総説」をめぐる一連の論文で展開された啓発的な論述から、わたしは多くのことを学んだ。地域学の目的を、自己/個人を出発点に、ひとりひとりの「生の充実」と「生活の質の向上」を目指すこととすることに共感を覚える²⁸。移動の時代に生を受けたわれわれは、中央集権的な国民的アイデンティティへの同化に埋没されない「個」としての生き方を模索する機会をついに手に入れた。その意味で「地域学」とはいかなる既存の制度化された学問にも収まらない未来に属する学問だと言えよう。

しかし、最新論文で提起された、『『地域学』の究極の目的は、『地域を創る』ことである』²⁹という問題意識については理解に苦しむと言わざるをえない。論文では「地域を創る」ことを、1「地域はどう在るのか」、2「地域はどう在るべきか」、3「地域を創る」の三段階からなるとし、そのうちの1「地域はどう在るのか」を把握することの困難さが指摘されている。それについては本稿の第一節で、静態的ではなく、動態的に地域が変化するプロセスを捉えてみることを提起した。しかしその次のステップ、つまり「地域はどう在るべきか」はいかがだろうか。正直なところ、いったい誰が、いかにして「地域のあるべき姿」を決めるのか、筆者にはイメージできない。その過程で同意の強制が生じないのだろうか。仮に「あるべき姿」をめたく決めることができたとしても、そこから、そのコミュニティへの完全な同化がまた地域の全住民に求められるようにならないのだろうか。そうなると、結局、近代の支配的なコミュニティである国家と似通うような呪文が再び唱えられることにならないのだろうか。

「地域学」とは未来に属する学問である。われわれは、既存の行政区分にとって代わる、人々が生活する空間をまとまる/区切るある未知な単位を模索していると言うことができよう。そうだとすると、「地域はどう在るべきか」という問いは、いわば国民国家崩壊後の世界はどう在るべきかとほぼ同意の極めて大きな問題になるであろう。その探求は難しいからやめようと言うつもりはない。ただ、従来を前提とした学問体系の中で教育を受けてきたわれわれにとって、近代の呪文から逃れることは決して容易なことではないため、聞こえの良い言葉にこそ危険が潜んでいるのではないだろうか。第三段階の「地域を創る」という力強い言葉からは、せいぜい地域活性化や地域再生（この場合で言う地域を「地方」に言い換えても差し支えない）くらいの意味しか感じ取れないのである。

そもそも学問する究極の目的は、世界（人間社会と自然社会の両方）を＜創る＞のではなく、世界の本質をよりよく＜見る＞ことにあると考える。自然社会をよく見るためには、顕微鏡を使ったり、虫眼鏡を使ったりすると同じように、人間社会の複雑な構造をよく見るためには、道具と手段を選ばなければならない。「地域」あるいは「地域学」という視角は、世界を見直すという知的営為のための良き虫眼鏡ではなかるうか。

むろんただ見るだけでは能動的にはならない。大学とくに地方に位置する大学は教育/研究機構として、地域（地方）の活性化に何を貢献できるのか。例えば問題解決のために行政に直接参加して異議を申し立てる。あるいは研究対象を専ら目の前の地域に向けるようにする。そのいずれも有

²⁸ 柳原邦光他『『地域学』を創る 鳥取大学地域学部の試み』『『地域学論叢（鳥取大学地域学部紀要）』第4巻第3号（2008年）、370頁。

²⁹ 柳原邦光『『地域学総説』の挑戦3』『『地域学論集（鳥取大学地域学部紀要）』第5巻第2号（2008年）、195頁。

効かもしれない。しかしそれだけではないはずである。自らが生活する地域から遥か離れた場所について、一見すると生産的ではない研究をすること。その研究成果を学生または一般の地域住民、あるいは地域と関係なく、この地球で暮らす誰かに伝えること。彼らひとりひとりの脳幹を刺激して楽しませることが、「生の充実」、「生活の質の向上」につながるに違いない。そしてわたしが生活するこの地域ないしこの地球の活性化に貢献することにつながるのではないだろうか。

「地域学」について明確に定義づけることは、現時点ではわたしの力量の及ぶところではない。しかし「地域学の究極的な目的」がもしあるとすれば、それは文学でも社会学でもいかなる学問でも同じであり、つまり人々の(精神)生活をより豊かにするという一点に尽きるのではないだろうかとわたしは考える。

3. 「ここ」に生きる「わたしたち」を考えるということ(仲野誠)

(1) 「地域」とは何か、なぜ「地域学」か

学問(特に人文・社会科学)の役割とは、端的に言えば自分たち自身を相対化する力を身につけることといえるだろう。それは時間的・空間的な自分の立ち位置を知り、わたしたちはなぜ「いま・ここ」でこのような生き方をしているのか、そしてこれからどこへ行こうとしているのか/どこへ行けばいいのか、というような思考力/想像力を鍛えるツールであると思う。

このような観点から、社会科学の役割についてももう少しだけ踏み込んでみると、これは人間が作り出したもの(社会構造、価値・社会規範、制度、実践など)が人間の手を離れていつの間にか独り歩きし、逆に人間を支配するようになる「社会」なるもののメカニズムを解明し、それを人間の手に取り戻す試みあるいは道具ともいえると思う。そもそも人間が幸せになるために自ら作り出したものが、いつの間にか人間がそれに従属するようになるということはよく起きることだ。このような、「社会」が凶らずも人間を裏切っていくメカニズムを解明し、そのようなメカニズムから相対的に自由になるようとする意思が社会科学を支えてきたのだと思う。

このように考えてみると、「地域学」とは、わたしたちが必ず立脚せざるを得ない拠りどころであるはずの「地域」なるものを再び自分たちの手に取り戻す試み、と言えないだろうか。わたしたちは「地域」にしか存在し得ない、というのはある意味当たり前のことである。しかしこの重要性がしばらくの間、忘れられていたのだろう。いま「地域」が着目され、わたしたちが「地域学」をつくりあげようとしているのはこのような背景があるからだ、と筆者は理解している。

たとえば、光多長温が指摘しているように、高度経済成長期の日本では「地域」は一義的な重要性を持たなかった(「挑戦」で柳原が要約している)。当時の政策目的は「均衡ある国土の発展」だった。しかしそれは結果的に国土の不均衡発展をもたらしたことにわたしたちは気付いた。そこで、地域政策は国土計画の受け皿であることをやめて、その地域に住む者たちが自らの地域をつくる主体となり、国家はそれを支援する側に回ろうという体制に移行してきているということだ。国土計画に基づく高度成長から、地域の個性に基づいて地域住民が決める、地域主体の地域づくりへの移行というわけだ。「地域づくり」をはかるためには、様々な地域資源を見直し、その活用が必要になってきているという背景がある。

1960年代から70年代にかけて、成長第一主義と国土開発に象徴される高度成長の「陰」として公害問題が現れた。わたしたちのものであるはずの「地域」が、国土の開発が進むほどに、次第にわたしたちの手を離れ、様々な可能性が縮減/消滅し始めた。そのような「開発」は逆にわたしたちの安心を奪い、「ここ」には愛着・希望・誇りを見出せず地域から流出する人びとが増加した。気

付いたら、わたしたちのものであるはずの「ここ」はいつのまにか自分たちの手を離れてしまったかのようなのである。問題は経済や自然環境などの歪みにとどまらず、そこに暮らす人たちの地域アイデンティティ・自己アイデンティティや自尊心など、心理的な領域にも及ぶだろう。

このような状況に対して、たとえば1970年代には「地域主義」(玉野井芳郎)、そして1980年代には「内発的發展論」(鶴見和子)などのオルタナティブな社会構想を考えるためのパラダイムが提唱されはじめた。研究者ではない多くの人たちも、高度成長による恩恵を享受する一方で次第にそのおかしさには気付きはじめていた。しかし「何かがおかしい」とは思いつつも、多くの人たちにはそれを問題化する視点や方法がなかったのだろう。資本主義がいよいよ実感として停滞し、近所の商店街が「シャッター商店街」と化していくのが目の前で展開されるにつれ、「地域」というものの重要性が確実に実感されてきたということなのではないだろうか。それはわたしたちの多くが長い間放っておいてきたことなのだ。「地域学」は地域を自分たちの手に取り戻そうとする試みだと思う。

そもそも「地域」とは何か、とか「地域学」とは何か、という議論は、本学部で議論が積み上げられてきた。柳原は「地域学総説」で紹介されてきたそれらの議論を、要領よくまとめている(「創る」、「挑戦」、「挑戦1」、「挑戦2」、「挑戦3」)。これらの問いはこれからもずっと議論を積み重ねて、それらの概念は継続的に鍛え上げられなければならないものであろう。しかし、その一方で、これらの問いを追求することばかりが続けられてもあまり生産的ではないとも思う。

(2) 2つの往復

柳原は「挑戦3」で、筆者の「地域」への視点をまとめている。それは、地域を鳥瞰する視点に対して、「虫瞰」という視点である。あるいは「足元から」あるいは「わたしから」地域を考えるという見方である。言い換えれば、それは「わたしにとってリアリティのある地域」から思考をはじめるということであり、「わたしによって/人びとによって生きられている地域とは何か」を問うものである。そしてそこでは、「地域を上から眺めること」や「地域を自明視してしまう」ことへの懐疑がつきまとう。

それを柳原は、本稿の冒頭で次のように言う。

この意味で、地域学とは、当事者性(自分の人生の主人公であることを貫くこと、自分の心の中に小さな誇りをもつこと)を確認し、新たな関係性の構築を目指すものではないだろうか。地域といえば、すぐに地域活性化となってしまうがちだが、活性化それ自体が目的なのではない。いい人生を生きたい。しかし、「人に迷惑をかけない」ではなく、「人に頼り、また人を助ける、自分が弱っても倒れない関係性」をどうやってつくっていくか、これが問題である。こうした努力を重ねることで、結果的に地域もよくなっていくのではないか。

仲野のこの見解は、「わたし」を起点にして人と人とのつながり・関係性の意味を問い、その見直しと再構築を迫るものである。この場合、地域という言葉は必ずしも必要ないかもしれない。明示されていないが、仲野には地域という枠組で発想すること自体に何か違和感があるのかもしれない。それでも、あるいは、だからこそ、この視点は地域(「生の充実」に関わる場)を考えるとき欠かせないのではないだろうか。(本稿257ページ)

柳原が、筆者の見方を「地域で発想すること自体への違和感」と表現するのは必ずしも正確では

ないかもしれない。確かに、「地域学」の目的は、「地域」なるものを「活性化」させることそれ自体ではないだろう（そもそも、「地域」を「活性化」させるということがよくわからないように思う）。そうではなく、その目的は、そこに暮らす人たちの暮らしにくさ／生きづらさなどを明確に問題化し、それを解決することあるいは解決することに寄与することであるはずだと思う。柳原の言葉を使えば「生の充実」とも言えるだろう。

しかし、わたしたちの生は必ず「ここ」にしか生起し得ない。どこか抽象的な空間や場所における生はありえないため、生のあり方を考えるためにはその場所の固有性に目を向けなければならないはずだ。つまり、仮に一般的な「生の充実」は語り得るとしても、「ここ」で具体的に展開する個々人の（あるいはその集団としての）「生の充実」につながる一般的な方策はありえない。必ずその生が生起する場の固有性をも考察の対象に入れなければならない。そうであるはずなのに／そうであるべきなのに、これまでは前述した「地域より国家」や「国家の＜発展＞は国民の豊かさへ直結する」という発想とそれに基づく諸実践が行われてきたのだ。もちろん、当時はそれが望ましいこととされたわけであるが、一旦それを相対化する視点をもってしまったわれわれにとっては、過去のそのような政策はいまや乗り越えるべき対象である。これは、国家の政策が「地域」という概念をおろそかにしてきたということである。

それは、目的と手段が逆転してしまったことによる意図せざる結果の創出ではないだろうか。高度成長は当時の「望ましいこと」だったわけで、多くの生きづらさを各地につくることが目的ではなかったはずだ。しかし、結果的に意図せざる結果が生み出され、本来の目的であるはずの人びとの幸福／生の充実よりも国の豊かさが追求されていった。人びとの幸福を達成するという目的と、そのために国の豊かさを作り出すという手段の関係が逆転してしまったということではないのだろうか。そこで政策は手段であることをやめ、それを維持すること自体が目的へと転化していく。

以上は、政策的な側面であるが、学問上でも、もし仮に具体的で固有な生を射程に入れない地域の研究というものがあるとしたらそれも間違っていると思う。もちろん、そのような地域学や地域の研究は論理的にはありえないはずである。なぜならば、そこに生きる人たちを看過した地域学など単純に想定できないからである。柳原が言う、筆者の「違和感」とはここにあるのかもしれない。それは地域学という学問の目的と手段が逆転してしまうことへの懸念とでもいえるだろうか。それを学んでいる者たち自身が、地域学の目的や意義を言語化／自覚化できないままに「地域を調べる」という作業を行ってしまうことへの懸念でもあるかもしれない。おそらく上の柳原による筆者の解釈は誤りではない。ここではそれをもう少し丁寧に補足しているということだ。

それは言い方を換えれば、「わたしはなぜこのようであるのか」を知ることであり、「わたしの問題を生み出す原因」に気付くことでもある。そしてそれには常に「ここに生きるわたし」あるいは「ここに生きるわたしたち」という形容がつくということだ。それが先に述べた「相対化する力」なのだが、それはさまざまな次元やレベルからのアプローチが可能だろう。

次が様々な着眼点の次元のイメージ図である。

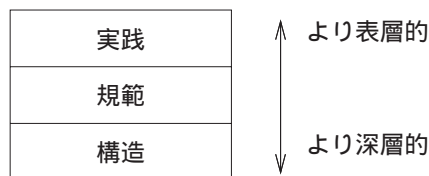


図 「地域」を考える様々な視点

この図の一番下は、社会構造、産業構造、人口構造などのひとまとまりの構造である。その上に、その時々構造にふさわしい規範、価値、望ましが形成される。そして、一番上が、それに沿ってそこに生きる人たちの日々の実践（生き方、振る舞い）、というイメージである。

これまでの議論に例えれば、一番土台の「構造」に着目するのが「光多説」、規範の力を考えるのがノームに着目する「吉村説」、実践の次元により目を向けるのが「仲野説」ということになる（「挑戦3」）。そして、繰り返しになるが、一概にどの次元に着目するのが適切だとはいえない。それは問いの設定によって変わってくる。「ここに生きるわたしのありかた／暮らし」を規定する力・要因としてわたしを取り囲む構造に着目したり、わたしの日々の実践を促しており、わたしが疑いもなく信奉している規範を相対化するのはひとつのアプローチの仕方であろう。また、私の何気ない日々の振る舞いが私を取り囲む規範や構造を気付かずに更に強化していることを考えるのも、別のアプローチ法である。

これら、様々な次元で起きる事象はどれかが独立変数でどれかが従属変数というような固定的な関係にあるわけではない。つまり人間は操り人形ではないし、自分で合理的判断をして自らのふるまいを決められる自律／自立した存在でもない。それぞれが弁証法的な関係性にあるから、自分の問いに応じて、どこに着眼するかを決め、そして他の要因との相互作用を見ていく必要がある、ということになる。これがひとつ目の往復である。

もうひとつの往復がある。それはミクロとマクロの往復である。上のそれぞれの次元でミクロな事象からマクロな事象までが想定可能だ。たとえば、「実践」あるいは「ふるまい」の具体的な現れのひとつである「アイデンティティ」を考えてみる。例えば、ごくミクロな心理学的・個人的なアイデンティティが設定できるが、同じ人間が時には「鳥取県民」や「日本人／日本国民」あるいは「世界市民」というアイデンティティをももち、それは状況によって使い分けられる。そして、それはさまざまなレベルにおける規範や望ましさと深く連動していることは言うまでもない。

また、「構造」について考えてみても、「アイデンティティの構造」なるものを議論することも可能だし、また空間的な範囲で考えれば、足元の近隣社会の様々な構造から、それが深くリンクしているグローバルな構造まで考えることができる。たとえば、いつのまにかわたしのまちに日系ブラジル人が増え、そして最近の経済状況の悪化に伴って今度は転出するブラジル人が増えてきている、というようなローカルな場に起きている人の移動を理解するためにはグローバルな視点が欠かせない。わたしのまちの産業構造を理解するためには、グローバルな産業構造を考えねばならない。わたしの足元で生起するローカルな現象とグローバルな構造は不可分の関係にある。このようなグローバル・ローカル関係に象徴されるような、ミクロとマクロの往復がもうひとつの往復である。

ここにも「地域」概念の有効性が見出せると思う。わたしは「ここ」にしか生きられないが、そのわたしの「ここ」はその外部と常に関係性を取り結びながらしか存在し得ない。では、その関係の範囲をどこまで広げるのか、ということが問われるだろう。「地域」とはその関係性の範囲のことでもあると思う。この概念を使うからこそ見えてくるものがあるのだ。それは制度的な境界線（たとえば国境など）とは別の空間的な広がりやつながりのことだ。ローカルな問題にはローカルな対処法があり、グローバルな問題にはグローバルな対処法がそれぞれ個別にあるということではない、といってもいい。

地域学の役割のひとつは、このような「ここに生きるわたしのありよう」を考えるために、上述のような「構造・規範・実践」の様々な次元を、あるいは「グローバル・ナショナル・ローカル」のような様々なレベルを自由に行き来し、その上でわたしが生きる「ここ」を考える想像力を鍛え

ることではないだろうか。そして、しつこいようだが、その場合の「ここ」は決して「ローカル」だけを意味しない。それは問いの設定によって自在に変化する空間のことである。

その意味で、地域学というのは「ここ」を問う学問だともいえるかもしれない。わたしは「ここ」でどのように生きてきたのか、「ここ」でどのように生きているのか、そして「ここ」でどのように生きていけるのか／生きていきたいのか、を問うということだ。そのためには徹底的にこの「わたし」から出発するしかないと思ふのだが、もちろんこの「わたし」個人だけに着目しても何も見えてこないことは以上の議論から明らかだ。「わたし」の幸福をもたらす条件は何か、その基礎はどこにあるのか、この問いを立てれば、「わたし」の幸福と「わたしたち」の幸福の関係性はどのようなものか、その時の「わたしたち」の範囲はどの程度まで広げればわたしの問いが解けるのか、ということを考えざるを得ない³⁰。「ここに生きるわたし」を考えるために、「ここ」を相対化すること、あるいは「わたしたち」の秩序を形成している範囲を考える想像力を鍛えること、これが地域学の役割であり、また可能性ではないだろうか。

徹底的に、わたしが立つ「ここ」を問うことが重要だろう。必然的に「わたし」を考えるためには、「わたし」を支える関係性をも問わねばならない。それが近隣居住区なのか、メル友ネットワークなのか、わたしの今年の越冬を支えてくれる石油産出国の労働者との関係なのかは、問題の設定の仕方によって変わる。

(3) 実践としての卒論

以上の「地域とは何か」とか「地域学とは何か」という問いは、これからも議論され続けて鍛えられ続ける必要がある概念だと思う。それに加えて、今後もっと議論していかなければならないのが地域学の実践であろう。これに関しては家中茂が「創る」で「地域学教育」について論じている。筆者も、家中の議論と重複する内容になってしまうが、地域学を実践の面から少し考えてみたい。

ゼミの議論で以前このような意見が出たことがあった。「社会を変えたい」。これは地域学や社会科学の学徒としては大変好ましい発想のように思われるが、よく考えてみるとこのシンプルな発想はいったい何を意味するのか、あるいはそれがいかにして可能なのか、よくわからない。これは実践の問題であるように思えるが、この場合の「社会」とは何を指しているのか。そして「変える」とは何をどうすることなのだろうか。

あれこれ考えてたどり着くのは、「やっぱり私には社会なんて変えられない」とか「仕方がない」という諦めであることが多いようだ。学べば学ぶほど、丁寧に考えれば考えるほど、問題の複雑さやそれを取り囲む範囲の広さが次第にわかってきて、ますます自分には手の負えない問題であることに気付くのである。「勉強すればするほどわからなくなる」というのはある意味健康的だ。先ほどの表現を使えば、わたしの足元に現れる問題は当初のわたしの想像をはるかに超える広い範囲や一生会うこともない人びとに確実につながっており、驚くべき重層性をもっていることに気づいて驚愕し、尻込みしてしまうのだ。もちろん学問は自分の無力さを痛感して問題から撤退するためであるのではないから、ここで学問の「実践」が問われることになる。

「学問における実践」について、家中は「この問いに答えようとする、この問いを問い続けること自体のなかに、学問における実践がある」と言う（「試み」384）。家中はまた「一人ひとり

³⁰ これが筆者の「地域学入門」と「地域学総説」での講義のタイトル「ローカルのグローバルな基礎とグローバルのローカルな基礎 わたしの幸福とわたしたちの幸福」の意図することである。

が自分自身の言葉で、つまり、自分自身の経験にもとづいて、『地域学とは何か』が語れるようになることが地域学の実践なのである」とも言う（「試み」387）。この思考から学べることはずいぶんあると思う。

先ほどの「社会を変えたい」という発想のなかでは、働きかけ（実践）の対象が「社会」である限り自分の無力さを痛感し続けることになるだろう。しかし、わたしたちは「ここ」という固有の場にしか生きられない。それがわたしにとってのリアリティである。そうであるならば、わたしの実践は「社会」という得体の知れない怪物に立ち向かうのではなく、わたしが暮らし、働くことになり、家族や友人がいる「ここ」で、わたしにできることを模索し続けることなのではないだろうか。これは、地域学は「地域」を自分の手に取り戻す学問だ、という先の議論と重なる。そしてその場合の「地域」（あるいは「ここ」）の範囲や、それへの働きかけ方（実践の内容）は、その時々自分の問いに伴って変化するのである。この試行錯誤のプロセス自体が地域学の実践ではないだろうか。

大学における地域学（教育）の実践というのは、当初は曖昧でかたちにならなかった自分の疑問をきちんと問題化し、それに対峙すること／し続けることそのものだと思う。われわれは通常自分の手持ちの道具では問題に立ち向かうことはできないので、新たな道具を手に入れなければならない。

自分の問題にきちんと向き合い、自分なりの解決法を見出すために、他者から学ぶ。そして「ここ」で自分が生きていく方法を模索し続けること、この過程そのものが地域学の実践であろう。言い換えれば、それは「ここ」で生きていく際に直面する自分にとって切実な問題に対峙することであり、それを乗り越える／解決する／やり過ごすための方法を他者から学ぶこと（他者の視点を獲得すること、他者の声に耳を傾けること）だ。これは「ここ」の相対化および「ここ」における自分の人生の相対化、とと言ってもよい。

その具体的な試みの代表的なものが卒業研究だろう。これは4年間の学びの集大成であるとは言ってもないことだろうが、卒論はむしろ「卒業後のスタート地点の設定」あるいは「卒業後の実践のための準備運動」と筆者のゼミでは位置づけている。

そもそも疑問がない人が問いを立てるのは困難なことである。そして漠然とした疑問があっても、そしてそれがいかに気になって仕方がないことであっても、それをなかつたことにせず、「問い」として立ち上げられなければそれに向き合うことはできない。姿の見えない「敵」に立ち向かうことはできないのだ。そして「問い」を立てるために必要なのは、それまで自明視していたパラダイムの外に出ることだろう。その問題を作り出した枠組みと同じ枠組みではその問題は解けない。新たなパラダイムは自らの実践をしている人たちから学ぶしかないのだと思う。

それが「地域で生きている人たちの実践から学ぶという実践」だ。まず学生にとっての実践とは、自分の疑問を問いに転換し、それを解くためにここに生きている人たちの暮らしの実践から学ぶことだろう。そしてその学生たちも、卒業してどこかに暮らすことになり、どこかで働き、どこかで家族を形成することになる。その段階ではもはや論文など書く機会のない者がほとんどであろうが、学生時代とは違う実践をすることになる。そしてその時の問いも学生のときにもっていた問いとは違うものになっているだろう。学生にとっての実践と生活者にとっての実践が必ずしも異なるわけではないだろうが、人は人生の段階やその時々状況によって異なる問いを抱え、それを解決したり、やり過ごす力をつけるためにその時々の実践をするのだ。このような意味で実践とは不断のプロセスだといえる。

また、おそらく学生時代に大切なのは、4年間のまとめおよび卒業後の準備運動としての卒業研究の成果を学外に伝える機会をもつことではないだろうか。その理由は社会調査の作法上におけるインフォーマントに対するフィードバックという意味合いもあるが、それだけではない。それは、学生にとっての実践である学びを一旦自分の言葉で表現し、自分が学ばせてもらった人びとに還元し、批判やコメントをもらうためだ。それは、卒業後の自分の生き方そのものを実験場とした地域学の実践の糧になると思うからである。また、学生が学ばせてもらった人たちに「ここで生きる」ことに真摯な関心をもつ学生の存在を知ってもらうことは大切だと思う。卒論としてまとめられたその(ひとまずの)成果は、つたないかもしれないが地域で暮らす人たちにとっても何らかの刺激になるのではないだろうか。発表の場は、学生と学外の人たちが新たに出会い直す場にもなる。これも重要だ。このような学外への還元活動を通して、学生も「ここ」のメンバーとしてその存在を認知され、そして地域に暮らしながらも必ずしもそのメンバーではない彼らが地域のメンバーとして組み込まれればよいと思う。

そのような「学びの実践 その表現・還元 自らの暮らしの実践」というサイクルが繰り返されていくことがその人の生の営みを常に問い直す契機になるだろう。そしてそれが地域学の実践に他ならないと思うのである。

4. 21世紀の国のかたちを先取りする「創造的地域づくり」(野田邦弘)

鳥取大学は、平成16年度の法人化を契機に地域学部を設置したが³¹、そこでの教育理念は「地域の公共課題を環境、文化、教育および政策の四つの視点から教育し、地域の維持可能な発展を担うキーパーソンを養成」することとなっている。私自身、このような理念を掲げ「地域」というキーワードを軸とした大学改革に取り組む鳥取大学に魅力を感じて本学の教員を志望した。私が、以前勤務していた横浜市や横浜市立大学事務局(当時横浜市大で私は、法人化に向けた大学改革、国際交流、生涯教育などを担当した)での経験をとおして、大学と地域との関係について自分なりに考えていたという背景もあった。

平成17年度から本学地域学部へ赴任し、地域学研究会幹事会を運営しつつ、学部教員と一緒に「地域学入門」「地域学総説」「地域学セミナー」などを企画・運営するなかで、自分なりに地域学とは何か考えてきた。ここでは、限られた紙幅のなかで、私にとってなぜ「地域学」なのか問題提起を行いたい。

(1) 産業構造の転換と創造産業(「知」の創造)

『地域学論集』に掲載された『『地域学総説』の挑戦』シリーズのなかで、「地域」について、藤井が経済地理学の立場から、吉村が空間レベルにおけるノームを重視する文化論から、光多が政策主体・適用範囲の立場から、家中が「官」と一線を画した「民間」を通して見る立場から、仲野がかけがえのない実存的「個」との関連を重視した立場から、一盛が「地域社会」概念の変遷を歴史的なパースペクティブから相対化する立場から、論考されている。各教員の専門分野を背景にしたこのような多彩な地域観の存在こそが、地域学の学際性を示している。

³¹ 鳥取大学は、平成11年度教育学部を教育地域科学部に改組し、さらに、平成16年度には地域学部へ改組した。

私は、21世紀のわが国の姿を考える際のキーワードは「地域」と「創造」ではないかと考えている。このことについて「知の創造」「人の創造」「場の創造」の3つのフェーズで考えてみる。

わが国は、明治維新以降西洋にキャッチアップする政策で国づくりを行い、成功した。それは、希少な国内の自然資源というハンディキャップを優れた技術力でカバーし、品質の高いものづくりを行い、それを輸出して外貨を稼ぐというモデルであった。これをリードしたのが旧経済企画庁（現内閣府）や旧通商産業省（現経済産業省）といった中央政府であった。産業政策は中央政府が担うということを誰も疑わなかった。また、日本の経済成長を支えてきた産業は、電気製品や自動車といった製造業が中心であった。

しかし、中国やインドなど潤沢な低賃金労働力をかかえる国へ製造業の拠点は移転し、技術面でも韓国など新興国の発展が著しく、わが国の産業政策は、従来のような規格品の大量生産といったモデルから大きな転換を求められている。それは、端的に言えば「ものづくり」から創造産業³²を柱とする「知財国家」への転換である³³。

アメリカでは、双子の赤字をかかえ、産業競争力が低下していた80年代レーガン政権下に発表された「ヤングレポート」³⁴では「知的財産の保護」がうたわれ、その後知的財産政策に反映、90年代のIT分野での繁栄につながったといわれている。わが国でも、2002年に政府に「知的財産戦略会議」が設置され、同年「知的財産戦略大綱」が決定、2003年には「知的財産基本法」が施行され、同時に「知的財産戦略本部」が設置され、知財への取組が本格化した。このような流れの中で、理科系の学部等を中心として産学連携が強く押し進められることになった。

(2) 創造的人材とそのライフスタイル（「人」の創造）

さて、知的財産がこれまでの資本（土地、施設、機械、原材料など）と異なるのは、それが個人に内在するという存在形式である。つまり、知財開発を担う創造的才能を持った人材こそが最も重要な資源となる。わが国でも今世紀に入ってから知財への取組が本格化した。前述の「知的財産戦略大綱」では、「経済・社会のシステムを、加工組立型・大量生産型の従来のものづくりに最適化したシステムから、付加価値の高い無形資産の創造にも適応したシステムへと変容させていくことが求められている。加工組立型のものづくりにおいては、調和のとれたチームワークが重要な要素であるが、発明や著作物等の情報の創造には、個人の自由な発想が鍵となる（以下省略、下線は筆者による）」と個人の重要性を指摘した。

地域の発展を握るのは創造産業に従事する創造的職業人であると主張したのが、トロント大学教授のR. フロリダである。彼は、アメリカでは科学技術者やアーティストなどの「創造階級（creative class）」（以下本稿では「創造的人材」と表記）が既に人口の3割を占め、社会に大きな影響力

³² いち早く創造産業政策を導入したイギリス政府の定義によると、創造産業（creative industries）とは、「個人の創造性、技能、才能に根ざしており、知的財産の開発や活用による福祉や労働の創出の可能性のある産業群。広告、建築、美術、アンティーク、工芸、デザイン、ファッション、映画、ビデオ、双方向娯楽ソフト、音楽、舞台芸術、出版、ソフトウエア、コンピュータゲーム、テレビ、ラジオ、など」である。

³³ だからといって、ものづくりは時代遅れだということではない。より技術力の高いハイセンスな付加価値の高い、製品を作ることは重要である。そこでは知財の比重が高くなっている。

³⁴ 産業競争力委員会（President's Commission on Industrial Competitiveness）の報告書*Global Competition- The New Reality*（1985）

を發揮しており、これからの地域発展の鍵はこれら創造的人材をいかに地域に呼び込むかにかかっているとされている³⁵。

ここで注目したいのは、創造的人材は地理的に偏在するというかれの主張である。広大な国土と豊富な自然資源を有するアメリカでは、企業は全土に分散しており、わが国のような東京一極集中といった現象は見られない。しかし、創造的人材の分布を調べてみると、サンフランシスコ、オースティン、ワシントン DC など特定の都市に偏在していることが分かった。産業立地論においては、特定の産業が地理的に集積することが早くから注目されていたが、フロリダの議論はこれを創造的人材という「人」に適用した点がユニークである。従来の産業立地論では企業の立地にとって他社との取引費用が重要な要素であったが、創造的人材の立地選択においては、フェイス・トゥー・フェイスによる、情報やアイデアの交換、さらには創造的人材の好むライフスタイルが可能な都市・地域環境の存在が重要であるという。シリコンバレーなどの研究を通じて、創造的人材が集積する理由は、彼らの知識や経験、ノウハウなどの蓄積や人的ネットワークの地域における存在が、創造的な仕事を試行する人々をひきつけ、イノベーションの源泉となっていることが分かってきた。

(3) 地域を再生する創造拠点(「場」の創造)

70年代以降、ニューヨークソーホー地区やグラスゴーなど、アーティストやデザイナーなど創造的人材が都心の疲弊地域に集積し、活動を展開することにより、地域を再生した事例が欧米で数多く報告されている。これらに共通しているのが、産業構造の転換などによる工場移転などで空洞化し治安が悪化した都心の疲弊地域の倉庫などの空きスペースでアーティストやデザイナーがアトリエやオフィスを開き(しばしば非合法的に)、活動を始めることにより地域が活性化し、結果として地価が向上するというプロセスである(ジェントリフィケーション)。このモデルは、70年代から80年代にかけて欧米で深刻化したインナーシティ問題の解決策として注目された。

創造的地域づくりにとって必要なのが、「クリエイティブ・ミリュー」といわれる創造的人材が好んで集まるアーティストックな雰囲気のある場所である。それは行政が提供する公共施設などではなくて、地域の歴史を刻んだ歴史的建築物などをコンバージョンしたものである場合が多い。このような場所で、様々な人々が出会い、交流することにより、企画会議のようなオフィシャルなミーティングからは生まれえないような新しいアイデアが生まれる。

このような創造的人材を吸引する小さな場を都心部に数多く生み出すことが、地域に創造的人材を吸引し、将来の創造産業をインキュベートすることにつながるのではないだろうか。例えば、鳥取市の中心市街地に空き店舗、空きオフィスなどを活用した数多くのクリエイティブミリューを創り出すことは政策的には可能である。

(4) 中央に替わるアクターとしての「地域」

いうまでもなく、国や地域の未来を決定づけるのは、そこにおける産業・職業構造である。要は人々が「何で食っていくか」である。わが国の場合、既存産業をそのまま温存する従来型のものづくり政策の延長では、現在の就業人口は養えない。なぜなら、既存産業の国際競争力をさらに高め

³⁵ R. Florida, *The Rise of the Creative Class: And How It's Transforming Work, Leisure, Community and Everyday Life* (Basic Books, 2002) (リチャード・フロリダ著、井口典夫訳『クリエイティブ資本論』、ダイヤモンド社 2008年)

るためには省力化を一層進めるしかないが、これは一層労働現場の雇用を減らすからである。

したがって、重要なことは将来性のある新産業を他国、他地域に先駆けて育て、他がまねできないような雇用吸収力の高い労働集約型の製品やサービス（創造産業）を開発・普及させることである。それは、先端技術や地域の伝統技能を活かしたハイテクでハイタッチ（高感度）なものである。そのためには、既に述べたように、創造的な「場」を作り、「人」を育成・吸引し、新たな創造産業のスタートアップにチャレンジすることが地域の産業政策の要となる。これからの産業政策は、環境問題や新エネルギー開発といった大規模プロジェクトを除けば、基本的には国単位ではなく地方自治体（地域）単位で取り組まれるべきである。わが国が今後国際競争力のある新産業を打ち立てるためには、固有の地域資源を活用しながら各地域が主体的に地域づくりに取り組むことが求められる。なぜなら、わが国には各地に埋もれた様々な資源があるが、それらは十分評価・活用されているとは言い難いこと、今後求められるハイテクでハイタッチな製品やサービスは、成熟した消費社会にあってどのようなものがヒットするか予測することが難しく、従来のような国家による一律的産業政策は適さないこと、などがその理由である³⁶。

夕張市（人口13,000人）は財政再建団体に転落し、公共サービスが次々に廃止され、住民は将来への希望を見いだせないでいる。一方、湯布院地域³⁷は文化を重視した民間の取組が奏功し、まちづくりの成功例として全国に情報発信している³⁸。今われわれは、自ら知恵を出すことなく、ひたすら国の補助メニューを物色しハコモノ整備を進める時代から、地域の住民が地域の強みを活かした創造的地域づくりを国と連携しながら主体的に進める時代をむかえており、未完の「地域学」もこのような文脈の中でその価値が輝くのではないだろうか。

おわりに

筆者（柳原）はこれまで執筆してきた「挑戦1, 2, 3」や共同論文において「地域学総説」で行われた報告や講演、議論を整理して、鳥取大学地域学部の、それぞれの時点での地域学をできるだけ正確に捉えようと努めてきた。もちろん、それぞれの教員のディシプリンは様々であるから、実際には地域の見方も方法論も目指すところも違はずである。地域学を表現するのは容易ではないが、そうした違いを超えてなお、大きく見ればひとつの地域学像を結ぶことができるのではないかと、そう考えて執筆してきた。ただそのために、授業を担当した教員の考えを誇張して表現したかもしれない。筆者の理解が不十分で誤って伝えた可能性もある。したがって、筆者の書いてきたものはやはり「筆者の理解」というべきで、すべての責任は筆者にある。こうした前提に立って、他の執筆者の見解を参照しながら再考したい。

最初に韓の指摘を取り上げよう。「地域学総説」に関わったことのない教員の意見であるだけにかえて明確で新鮮である。韓は2点において地域学に懸念を表明している。地域理解について、地域を空間的にはっきり線引きされた、強固で不変の文化的一体性をもつものと想定しているのではないかと。「地域はどう在るべきか」、「地域を創る」というとき、結局のところ、国民国家のミニチュアともいえるべきものを生み出すことになるのではないかと。単一のあり方を強いてマイノリ

³⁶ 国も一律の政策誘導型から各地にアイデアを競わせ、優れたものを支援するサポート型の政策に切り替わりつつある。

³⁷ 湯布院町は合併後由布市（人口35,000人）となった。

³⁸ 湯布院のまちづくりについては、木谷文弘『由布院の小さな奇跡』（新潮社、2004年）を参照。

ティの排除・抹消の危険性を抱え込むことになるのではないかと、というのである³⁹。この二つの指摘は論理的に連動している。

筆者にとって意外な指摘であったが、省みれば真摯に受け止めなければならないところがあるように思われる。率直に言えば、筆者には地域という捉え方に違和感があった。今もないとはいえない。というのも、地域という言葉にどことなく人を束縛し抑圧するものを感じるからである。これが筆者のスタート地点である。そのため地域学でいうところの「地域」とはなにかを、「わたし」から隔たった抽象的なところからあれこれ考え模索せざるをえなかった。この過程において、韓が鋭く捉えたような「地域」理解が筆者のなかで浮上してきたのは確かである。主観的には、反発と否定の対象としてではあったが、筆者が安易に「共同性」という表現を使ってしまった（この言葉は地域＝コミュニティ云々という文脈で浮上し、本稿でも用いている）ことからわかるように、筆者の理解にはところどころ混乱があるようである。指摘を踏まえて、今後もう一度チェックし整理し直したい。

ここでは以下の点をはっきりしておきたい。筆者も「地域学総説」に関わった他の教員も地域を韓が懸念しているようには理解していないということである。これは二つ目の指摘にも関わるので、まとめて説明しよう。筆者が「地域がどう在るか」、「どう在るべきか」、「地域を創る」というとき、地域をまるごと捉えて、不変の固定的実体だと認識しているのではない。全員一致で同じ方向を目指そうというのでもない。吉村、藤井、家中、仲野が各所で述べているように、地域は人々が直面する問題のかぎりにおいて検討の俎上にのぼる。問題によって対象となる空間的広がりに関係する人々が決まるのである。問題の解決に必要な限りにおいて空間を選択し、対処の仕方を検討するということである。筆者の表現が不十分で、言葉が足りなかったかもしれないが、先の地域を考える3段階は、問題に直面した人々が具体的に判断し選択するときに必要な思考のプロセスとして提案したものである（例えば、「挑戦3」の「4．地域住民の生活と行政」を参照）。表現は抽象的だが、切実な問題に直面し苦悩した経験からでてきた提言である。

「創る」についても、もちろん政策的なものも含まれるであろうが、筆者がもっと重要だと考えるのは、受身にならないこと（具体的な問題における、関係する人々の判断と選択、その集積としての「創る」と、日常生活における「わたし」を活かした営み・取り組みを含意している（「挑戦3」の「3．よき実践から学ぶ」を参照）。このとき指針となるのは、抽象的に言えば「生の充実」である。いうまでもないことであるが、人権がそうであるように、「生の充実」を目指すとき、これで終わりということはない。

次に仲野の見解である。筆者にとって興味深いのは、「地域」を「ここ」から捉えようとしていることである。「生の充実」（吉村の言葉）は高度に抽象的な表現であるが、仲野はそれを「ここ」という「場所の固有性」において考える。さらに言えば、人の生を「わたし」と「ここ」から徹底して具体的に考えようというのである。こうした試みを粘り強く続けるなかで視野に入ってくる、あるいは問題として認識される（可能性がある）のは、様々な構造と関係性、種々の規範、それらの相互作用である。どう振舞うのか、どう対処していくのか、という問題意識である。「地域」の

³⁹ この懸念は韓の次の言葉に端的に現れている。「純粹で固有な文化という概念は国民国家の時代が生み出した幻想にすぎないと分かっているながらも、地域文化と名称を変えてもなお社会を一つの均質状態として捉えようとしていないだろうか」、「そのコミュニティへの完全な同化がまた地域の全住民に求められるようにならないのだろうか。」

範域、「地域学」の目的、地域学でいうところの「実践」、すべては「わたし」と「ここ」から構想されている。決して「はじめに地域ありき」ではないし、単なる地域づくりにとどまるものでもない。

仲野は地域学の意義について次のように述べている。「地域学の役割のひとつは、このような『ここに生きるわたしのありよう』を考えるために、上述のような『構造・規範・実践』の様々な次元を、あるいは『グローバル・ナショナル・ローカル』のような様々なレベルを自由に行き来し、その上でわたしが生きる『ここ』を考える想像力を鍛えることではないだろうか。」この仲野の見解は地域学の全体像を見事に説明しているように筆者には思われる。それだけでなく、韓がいうように、地域学が学問の究極的な目的につながっていることを示してもいる。もちろんこれはきわめて困難な課題である。われわれ教員に求められるのは、仲野のいう諸関係・相互作用を念頭において、それを具体的に捉え提示することであろう。

最後に野田は、論点を絞り込んで、世界的な規模で進行する産業のあり方の変化とわが国の産業政策・産業構造の歴史を踏まえて、文化政策的な観点から今後の地域のあり方について提言している。知的なもの、文化的なものも経済的価値をもつ財産になりうるものであり、その知財化を担う創造的人材と彼らが集まる場であるクリエイティブ・ミリューがひとつの中心となって地域に自由な空間と活力をもたらすことができる、というのである。そしてこの条件づくりを政策として行うのが都市における「創造的地域づくり」である。

野田は本稿では具体例を紹介していないが、「地域学総説」(2006年度)では「芸術・文化の創造性を活かした地域創造 - 創造都市論の立場から - 」と題した基調報告をおこない、主にヨーロッパを中心に数多くの事例を取り上げた⁴⁰。確かに紹介された事例からはこうした試みが住民の生活に文化的な豊かさをもたらしたであろうことが推測されるが、筆者としては「わたしからの視点」や「生活者の視点」からみたらどうなのか、また、その都市の歴史的な文脈においたときどのように評価できるのか、興味は尽きない。

一例を挙げると、長柄裕美(地域学部地域文化学科教員)は2007年度の「地域学セミナー」で国立美術館テイト・ギャラリーの分館を誘致したイギリスの地方都市セント・アイヴスの事例を紹介している。それによれば、分館誘致は成功し、衰退していた町に経済的効果と誇りをもたらした。町は活気を取り戻した。ところが、現在、分館の拡張やさらなる開発計画の是非をめぐる町を二分する議論が起こっている。表面的には拡張の是非をめぐる議論にみえるが、その根底には、観光の推進と住民の生活とのバランスをどこに見出すのか、セント・アイヴスの町の良さをどうすれば維持できるのか、という本質的な問題があるという。長柄は報告の最後に次のように述べている。まちづくりが、一度のハッピーエンディングによって永遠の安泰が約束されるおとぎ話ではなく、絶えず新しい局面へと変化し、住民に対応を迫り続ける終わりなき物語だという事実を再認識させられたと⁴¹。取り組みの成果は住民の目線にたって長いタイムスパンで検証しなければならない。

「地域とは何か」、「地域学とは何か」を抽象的・理論的に検討するだけではあまり生産的ではない。もっと具体的な事例分析を加えて行うべきである。この意味で、本稿は不十分なものである。

⁴⁰ 柳原「挑戦」, 349-350頁。

⁴¹ 長柄裕美「イギリスの地方都市のチャレンジ」, 鳥取大学地域学部報告書『2007年度地域学セミナー 地域づくり 観光と交流の視点から』, 2008年, 10-13頁。

それでも地域学が様々な意味の実践に関わる以上、実践を評価するための物指しが必要である。それを備えることができれば、現実に生起している出来事や事例をより深く読み解くことができるだろうし、先行研究からもさらに多くを学ぶことができるだろう。そのためのステップのひとつと考えれば、本稿の試みも決して無駄とはいえないだろう。

(2009年2月5日受付, 2009年2月5日受理)